

新たな経済思想

池田 隆

新書ベストセラー作品『人新世の「資本論」』と謳う新聞広告が目に入った。「人新世」？ 今さら『資本論』？ 硬そうな表題なのにベストセラー？ と怪訝に思いつつ説明文を読む。脱炭素社会に向け脱成長の経済システムを提案しているらしい。

私自身も三十年来つねに資本主義に取って替わる新たな経済思想の出現を望んできた。これまでも『緑の資本論』（中沢伸一著）や『エス教養番組「欲望の資本主義」シリーズなどに接してきたが、心には響かなかった。『資本論』といえは難解な上、嘗てのソ連共産党などを思い浮かべ古色蒼然としたイメージを抱く。半信半疑の気持ちで購入し、読み始める。

著者は斎藤幸平というミレニアル世代の経済思想家、専門はマルクス哲学。「人新世」とは人類の影響が地球表面全体に及ぶようになった新たな年紀を指す。

著者の研究によれば、最晩年のマルクスはボトムアップ活動を行うコモン（地域共同体、コミュニティの語源）を評価しており、それは後世に『資本論』から展開された暴力革命や独裁的な共産主義体制とは相反するという。地球規模の気候変動やパンデミック、異常な社会格差といった現代の課題は生産至上主義の限りなき経済成長を前提

とする資本主義では解決不可と断定し、『資本論』の著述後にマルクスが着目したコモンに解決のヒントを得る。

新自由主義、MMT、金融緩和のみならず、SDGsや福祉国家、グリーン・ニューディールも資本主義の姑息な延命策に過ぎないと否定する。万人の生活に必須な食糧、水、電気、住居、教育、身近な交通手段、情報網はコモン活動の下、貨幣経済の外に置き、使用価値を基準に「ラディカルな潤沢さ」を求める。類似の事例はバルセロナをはじめ欧州各所で成功を収め、実績を上げているという。

日本の江戸期における脱成長政策も考察に加えて欲しいが、エネルギーや食糧の地産地消を提唱してきた者として同感する点が多々ある。大上段から骨太の経済論を易しく展開する本である。